
我が名はプー太

いおり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我が名はプー太

【Nコード】

N0777D

【作者名】

いおり

【あらすじ】

焼き鳥屋の女将さんに飼われている小桜インコのプー太の目を通して、人々の様子をちょっと皮肉って描いています。一話ごと短編になっています。

ぼくのご主人様

おならプッププーにプー太郎、そんな連想をさせる聞こえの悪い名前、プー太というのは、小桜インコのぼくである。

さーで、そんな品のない名前を付けてくれたご主人様、えー、ご主人様と呼ぶほどたいそうな人間とも思えないのであるが。

まあ、ご主人様の旦那が彼女のことを「ほれ、お前のご主人様が呼んでいるぞ」などとぼくに言うものだから、便宜上とりあえずそう呼んでおくでしょう。

そのご主人様は、ぼくの前にもプー太という小桜インコを飼っていた。

ご主人様は、初代のプー太をこよなく愛していたらしい。

食事の時はもちろん寝る時まで、いつも一緒にいたという。

だが、かわいそうなことに初代はとても短命で、たった三年しか生きられなかった。

その時、獣医に注意されたのが、ゲージから長い時間出したり、限られた物以外むやみに人の食べ物を与えたりしてはいけないということだった。

ご主人様は、ぼくを飼ってからというものの獣医の言い付けを忠実に守った。

そのためぼくは、ほとんどゲージから出してもらうことも出来ず、おいしい人間の食べ物も知らずに生きてきた。

そんな御蔭か、無事八歳を迎えることが出来た。

楽しい思いをして短い一生を終えるか、ごく平凡な日々を送って長生きをするか、まあどっちが幸せなのかわからない。

だって、ぼくは後者の生き方しか知らないし、まあ大した不満もあるわけで無し、ただ欲を言えばもう少しゲージから出してもらいたかった。

しかし、そんな平凡な暮らしのぼくにも、命の危機があった時もある。

ところで、なぜご主人様が小桜インコを飼おう思ったのか。

それは、以前、ペットショップで小桜インコに一目惚れをしたからだという。

「わー、見て見て、ずんぐりむっくりしていてかわいい」

ご主人様は、他の鳥を見ていた友達を手招きした。

テーブルに置かれた雛の入ったゲージを、制服姿の中学生二人は、背中を丸めて頬寄せ合って覗き込んだ。

「ほんとだ」

「小桜インコっていうんだ、セキセイインコと違っておっぱが短い。ねえ、大人もみてみない？」

「じぞくらいんじ、じぞくらいんじ、じぞくらいんじ」

呪文を唱えるように二人は、大人になった鳥達の入っているゲージを見て回った。

「これだ！ じぞくらいんじ」

「手のひら位の大きさか、抹茶色のずんぐりした身体、まん丸な黒い目玉は同じだけど、おでこから顔が赤い！」

「雛はグレーっぽい顔しているのね。でも、この方がきれいじゃん」

「雛の色の方がいいのになあ」

「そうかなあ」

当時、ご主人様は、朱色の派手な顔がおきにめさなかったようだった。

そして、八年前、ぼくが初めてご主人様と出会ったのも、このペットショップ。

ご主人様が、結婚した年のことだった。

ぼくを見たご主人様は、店員にこう尋ねた。

「もう少し幼い雛は、いつ入るのですか」

「まだ若いですよ。こんなに立派な雛はめったに入りません」

その言葉に首を傾げながらも、ご主人様はぼくを買っことに決めた。

その時のぼくは、もう大人の大きさになっており、産毛もだいぶ生え替わっていた。

ようするに、店員の売らんがための嘘にご主人様はだまされたのである。

しかも、ぼくは病気持ちで、次の日から具合が悪くなった。

ご主人様はあわてて、近くの動物病院にぼくを連れて行ってくれた。

普通の動物病院では小鳥の診察をしてくれない、だからそこところをご主人様はきちんと電話で確認していた。

なのにだ、その病院でもらった薬を飲まされても、ぼくはかえって具合が悪くなる一方だった。

困ったご主人様は、別の病院にぼくを連れて行ってくれた。

そこは、ちょっと厳しい女の獣医である。

その獣医は最初の獣医と違って、検便をしたりぼくの体にさわったりして念入りに調べてくれた。

その時、獣医から、「たぶん、男の子でしょう」と言われた。

最初の獣医はこの獣医の後輩で小鳥の診察はしていないはずだった。

しかもよこした薬は、今ではめったに使われない副作用の強い物だった。

副作用どころか、あのまま飲み続けていたら死んでいたかも知れないという。

まったく、ひどい藪医者もいたものだ。

診察料さえ取れば、小鳥の命などなんとも思っていないのだろう。

もしこれが、人間だったら医療ミスで大騒ぎのところだ。

それ以来ご主人様は、その病院の前を通るたびに「藪医者め、うちのプー太を殺す気か」と小声で言っ通るようになった。

無論、本人を前に声にする勇氣など、ご主人様にはなかったが。

とにかくにも、ぼくは新しくもらった薬のおかげで元気になっ

ただ、その薬の苦いのなんのって半端じゃない。

薬を飲まされる度に吐き出したり、ご主人様の手に思いっきりかみついたりして大暴れをした。

そんな日々を送るなか、ご主人様がぼくに薬を飲ませながら、一度だけ涙を流したことがあった。

その時は、ぼくが噛み付いたために痛かったのかもしれない思っていたのだが、今になって思うと違うのかもしれない。

ぼくのためを思っていてくれていたのに、その思いも通じずに暴れるぼくを見てたぶん悲しかったのだろう。

今になって少し反省。

でも、ご主人様は獣医から「よくがんばりましたね。あなただから、プー太ちゃんはお助かったのですよ」と言われた時、少し照れながらも嬉しそうな顔をしていた。

これが、ぼくの命拾いした時のエピソードである。

あつ、それからぼくにとって、とっても大切な出来事が一つあった。

ある日のこと、ゲージをのぞいたご主人様は、信じられないものを目にすることになった。

それはなんと卵だった。

もちろん、この家の鳥といえはよくしかいない。

だからこれは、まぎれもなくぼくの卵であり、彼氏のいないぼくは無精卵を生んだのである。

ご主人様は、何度も何度も卵を見ながら驚きの声を上げた。

「えーっ！　メスだったの！」

店に集う偉人たち／カラオケの達人編 1

ご主人の旦那が脱サラをして、三年前から店を始めたのである。

鳥であるばくと暮らしていながら、焼鳥屋を始めるとは、人間はなんて残酷な生き物なのだった。

だが、鳥といっても鶏なので勘弁してやることにしよう。

ご主人様の家と店とは、かなり離れている。

だから、毎日お昼過ぎにご主人様は、ぼくを自転車の荷台にゲージに乗せると店までかよって来る。

そして、ぼくのゲージは、いつも店の入り口近くレジの上に吊るされる。

ほろ酔い加減で店に入ってきた客は、ぼくを見るなりこんな暴言を吐く。

「この鳥焼いてくれるのかね」

「いやぁーお客さん、その鳥は売り物じゃあないものですから」

旦那は笑って答える。

そろいもそろって酔っ払いは、同じジョークしか言えないのだからか。

ところで、この焼鳥屋へやってくる客はやけに偉い人物が多い。

食通に発明王、海外旅行通、とにかく色々なことのスペシャリストがいる。

そんな人々の中で意外に多いのが、カラオケの達人である。

このあたりの人間は、みんな歌手になれるのではないかと思うほどだ。

カウンター席から今日も聞こえてくる。

「そりゃ、彼女の歌はうまいよ。この辺で一番じゃないかな」

たまたま隣り合わせた古くから知り合いの女性を、その男性は褒めた。

「そついう野川さんもお上手じゃないですか」

「えっ、ぼく？ ぼくのことばねえ、どうでもいいの。やっぱり、きれいな女性が歌っている姿は絵になるよねえ。」

ねえマスター、ここ、カラオケ無いの。残念だなあー、マスターにも彼女の歌聞かせてあげたかったなあー」

「野川さん、アカペラでいかがですか？ なんていったって、この町の森進一と呼ばれていらっしゃるのですから」

「おふくろさんよ、おふくろさん、空を見上げりゃ、あつ、

この歌歌つと訴えられちゃいますからね、最近では歌えないんですよ、
ハハハハハッ！」

カラオケの達人編 2

カウンター席は知らない者同士を結びつける事も多い。

まあそれは、良しきにつけ悪しきにつけだ。

「この辺りで、俺にカラオケでかなう奴はいないんだ」

肝臓の具合でも悪いのではないかと思うような浅黒い肌で、小柄な五十代中頃の客が声を張り上げた。

「すごいですね」

旦那が相槌を打つ。

「そうだ、なんたって、有名な作曲家の学校で習ったんだから、俺は上手いんだ」

少し語尾が上がった口調で、瓶ビール一本をお通しと奴だけでじっくり飲みながら、ずっとしゃべっている。

「お客さん、なに歌うんだい」

隣に腰掛けていた初老の紳士が、声をかける。

「とか、だ。普通の人には歌えないんだ。いい歌だ」

「昔の歌だね。わたしは新曲しか歌わないから」

「今の歌はだめだ。 やっぱり、昔の歌は良いね。 なあ、マスタ
ーもそう思うだろ」

抜けた前歯の間から、細くなつた豆腐を撒き散らし同意を求めた。

「そうですね」

「みんな昔で時間が、止まっているんだよ。 それじゃだめだ、新しい歌歌わないと。 そう言ってもやっぱりわたしは演歌だけだね」

「ああ、演歌はいいね。 でもねえ、悪いけどおたくより俺の方が、たぶんうまいから」

「わたしは、いつもカラオケで九十点以上出していますよ。 八十
六点なんていうとがっかりしちゃうね」

「あの点数はだめだ。 下手な奴の方がよかつたりするんだ」

「譜面どおりに歌えなかったらだめなんですから、本当に下手だったら点数なんて取れませんよ。 点数を取る気になったら譜面どおりに歌う、それが出来なかったら本当に実力があるとはいえませんよ」

「そんなに言うなら、よし、これからカラオケに行こう。 よう、ママ勘定！」

会計を済ませると、カラオケの達人達はバトルへと出かけていった。

ぼくはこの後の二人の対決を見てみたいような、見たくないような。

とにかく、すごく気になった。

後日、初老の紳士が店に来た時、ご主人様が尋ねた。

「この間のカラオケはどうでした」

「ああ、あれね」

「お相手の方の歌は、いかがでした」

「まあ、うまかったよ。だが、たいした事ないね」

その後、もう一人の客は現れることはなかった。

グルメ編（前書き）

第2部だったので、4部に変更させていただきました。

グルメ編

様々な偉人達の中で、なんと言っても一番多いのは食通だ。

どうしてこんなにいるのだろぅと思うほど、食べ物にこだわっている人達がいる。

「鯖は関鯖にかぎるね。ラーメンは、あの店のスープにあっちの店の麺を入れたら最高だね。」

あつ、その大根おろしの汁、そこがおいしいんだよね、知ってた？
ねえ、その焼き鳥、カリカリになるまで焼いてね。大将、焼き方最高だね、こうばしくっておいしいよ」

真っ黒に焼けた肉の上に、雪のように降り積もった塩。

皿一面を真っ赤な花畑に変えた唐辛子。

皿から溢れそうになる醤油の池。

食通の味覚はものすごい。

常人のぼく……いや、ただの鳥のぼくにはは、とうていついていけない味覚である。

また、こんな食通もいる。

「あそこの焼鳥屋はおいしいよ」

「そうですか」

「塩は何使っているの？」

「いやあ、お客さん、企業秘密ですよ」

人間都合が悪くなると企業秘密だとか何とか言って、ごまかそうとする。

「海水で作る塩なんかも、取れる場所によって違うよね。ピンク岩塩なんか最高だねえ」

「そうですね」

「焼鳥屋によつては、自家製の辛味噌置いてあるところがあるよね。あれいいよね。ここでも出せば」

「辛味噌、おいしいですよ」

「焼き鳥はやっぱり炭に限るね、備長炭がいい。炭の香りがつくんだよね。ここ、なにで焼いているの？」

「すみません、ガスなんですよ」

「ガスかあ、炭に変えたらいいと思うよ」

「そうですね」

「お宅も炭にすればいいのに、紹介してあげようか。知り合いに炭を卸している人がいるから」

と、色々焼き鳥のえらい講釈をするのだが、この客、いつ来てもこの焼き鳥は一本もたのまない。

うーん、味見もせずに味がわかるのだから偉い。

まあ、この客に限らず、焼き鳥に対する能書きを言う客に限って焼き鳥をあまり食べなかつたりする。

さて、今宵はいつたいどんな偉人がこの店の暖簾をくぐるのだろう。

この店に集う多くの偉人達に乾杯。

そして、毎日、偉人達の会話に相槌を打ち続ける旦那さんにぼくは脱帽する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0777d/>

我が名はプー太

2010年10月8日23時53分発行